

## 山東京伝の、洒落本の三・四文節文と、

### 十文節文とについて

斯 林 不二彦

#### 一、はじめに

山東京伝の文体を、文節相互の関係において見られるリズムの面から見ようとする試論を先に発表した。その際、「山東京伝の、口語文と文語文との関り」においては、用例を、主に、合巻本と読本とに求め、「山東京伝の五文節文と六文節文との基調」においては、主に、黄表紙から用例を採った。この度は、主に、洒落本の用例を集めた。吉田澄夫先生から、作品のジャンル別に留意するよう、ご示唆頂いたからである。洒落本は「通言総離」(天明七年)と「傾城買四十八手」(寛政二年)とを選んだ。これらは「岩波・日本古典文学大系 黄表紙洒落本集」によった。用例を求めた範囲は、「通言総離」(以下「通」)については、初め六頁(日本古典文学大系本三五七頁～三六二頁)、中程四頁(三六九頁～三七二頁)、終わり四頁(三八三頁～三八六頁)・「傾城買四十八手」(以下「手」)については、初め二頁(三九〇頁～三九一頁)、中程三頁(三九九頁～四〇一頁)、終わり三頁(四一〇頁～四一三頁)である。その他、十

文節文の用例では、読本の「昔語稻妻表紙」(以下「稻」、国民文庫刊行会・四四〇～四五五頁・一三七頁～一四二頁)、「本朝酔菩提」(国民文庫刊行会・一六四頁～一六五頁・一七一頁～一七二頁)。黄表紙の「人間萬事吹矢的」(以下「矢」、日本名著全集「黄表紙廿五種」、六七四頁～六八三頁)、同じく「御談染長寿小紋」(以下「寿」)の偶数頁。それに、合巻本「敵討両轎車」(以下「両」、初め二丁)、「敵討狼河原」(中程二丁)、「於六櫛木曾仇討」(終わり一丁)から採って参考にした。

#### 二、洒落本の三文節文と四文節文

「傾城買四十八手」の全会話文の平均文節数は約三文節であり、「卜書」「注」「評」などの文語体と見られるもの全ての平均文節数は約七文節である。これは、合巻本と読本とから主に用例を求めた際のものと同じである。それで、本論でも、三文節文と四文節文とを観ることから始めることにする。

三文節文の文節相互の修飾・被修飾関係の型については、「山東京伝の五文節文と六文節文との基調」(以下「先論」)で、黄表紙から用例を求めた時に見られた「A」「B」の二型と同じものしか見あたらなかった。



型

○お二人ながら 竹屋の 千両箱でござります 通・三七二べ  
○そんなら そふ 申しやう 手・四〇一べ

採った範囲では、この型が六十一例ある。文語体十七、口語体四十四である。主語が第一文節にある例十七。この傾向は先論の場合と同じである。第二文節が連体修飾である例は十二で、連用修飾であるものが多い。この点は、先論の時とは異なる。



型

○哥菊が 地口は どふだの 通・三七二べ  
○こゝへ きて いひなんしな 手・三九九べ

採った範囲では、この型が五十二例ある。文語体七、口語体四十五である。文語体の、口語体に対する例数の割合は、本論においても先論においても、A型の方が大きいし、この割合の、A型におけるものは、B型におけるものの約二倍半であることも、先論の場合と同じである。また、第一文節の、連体修飾である例が十五あること、第二文節が主語となる例を十三も数えることのできることに

は、先論で見た特徴と一致するのである。

四文節文の、この度採り得た用例の型を分類すると、五つの型を見ることができる。これは、先論で挙げたものと同じである。



型

○まへの 瀬川は どふ したの 通・三六一べ  
○つめりそふに したが 多んりよして つめらす 手・三九一べ

採った範囲では、この型が二十三例ある。文語体九、口語体十四である。先論では文語体の方が多かった。さて、二十三例中、第二文節が主語になるもの七で、これは、先論に指摘した特徴と一致する。しかし、第二文節に接続助詞の見られる例は、集めた例の多さにもかかわらず、三つだけである。また、第三文節が、名詞と格助詞とから成る連用修飾語であるもの十を見得るのも、この度の範囲の特徴とすべきであろう。



型

○よく げびを いふ やつだ 通・三五九べ  
○みす紙を つまに もちそへ らうかにて 手・三九〇べ

採った範囲では、この型が七例ある。文語体一、口語体六である。先論では三例しか見られなかった。「手・三九〇べ」の例は「注」

のことばである。次に会話文が続くものである。この型の文は、七つとも、第三文節が第一・二文節を統括している。これも先論と同じである。



○玉の井さんは やっぱり 仲町に いるかね 通・三六二ハ  
○しかし 茶屋は はっくと 思ふべし 手・四一三ハ

採った範囲では、この型が二十一例ある。文語体二、口語体十九である。第一文節が主語であるもの八で、これは先論の特徴と一致する。その他、第三文節が、名詞と格助詞から成る連用修飾語であるものを七例数えることができるし、第一文節が接続詞であるもの四例（「しかし」二例、「そして」一例、「そんなら」一例）を見ることもできる。因に、三文節文A型で、第一文節が接続詞であるものは五例（「そんなら」三例、「それで」二例）あった。



○こいつァ つめたくちゃ いかぬ やつだ 通・三六〇ハ  
○かほへ たはこの けぶを ふきかける 手・四一二ハ

採った範囲では、この型が二十二例ある。文語体九、口語体十三である。第一文節が主語であるもの九、第二文節が連体修飾であるもの十一を見る。これらは、先論で指摘した特徴と同じである。この

度の範囲では、第三文節が主語であるもの五例を見ることもできた。



○手めへの ことを 云 やつさ 手・四〇〇ハ  
○すは町の おやじが ぬいた ひたい 通・三五七ハ

採った範囲では、この型が十一例ある。文語体一、口語体十一である。第一文節が連体修飾であるものは五例で、先論の特徴と同じである。その他、第二文節が、名詞と格助詞から成る連用修飾語であるもの四例を見ることができ。

### 三、洒落本の五文節文

こゝで、先論において、三文節文を基調として成る傾向があるとした五文節文、並びに、四文節文を基調として成る傾向があるとした六文節文について触れておこうと思う。

まず、この度採った範囲における五文節文であるが、この型で、先論に挙げたものと合わないものがある。即ち



右二例が、この度は見あたらなかった。また、先論で見あたらず、

今回新たに加えた例、

○それでも 糸菊さんにおめへを とりもつてくれると いひ  
んしたとき 手・三九〇バ

これは、(a2・2)  型 といえよう。

四文節文 a2 型の発展と見てよからうか。その他は、すべて、先論の型と一致する。

a1・1  型

○むかふの 兵庫やに 居るのが 丁子屋の つき出した

通・三七〇バ

採った範囲では、この型が六例ある。文語体一、口語体五である。

第三文節が主語である例が四つあり、三文節文 A 型と比べられることと先論と同じである。但し、この度は、第三文節が接続助詞を伴う例を見ない。

a1・2  型

○わっちが 一こと いふと 十ことで けへしやす

手・三九九バ

採った範囲では、この型が六例ある。文語体三、口語体三である。第三文節に接続助詞を伴うもの三例で、先論の特徴と一致する。

a1・3  型

○このごろも どこかの 番に かへを 仕てもらったそうだと

通・三五八バ

採った範囲では、この型が五例ある。すべて口語体である。先論で挙げた、第三文節が主語である例は一つしか見えない。第三・四文節が、名詞と格助詞から成る連用修飾語である例は、それ／＼三つずつある。

a2・1  型

○なんに なっても ならひの いる ことだの 通・三六九バ

採った範囲では、この型が三例ある。文語体一、口語体二である。第四文節が、それまでの文節を統括するという特徴は、先論と同じである。

a3・1  型

○とど ゑん二郎へ 又 盃 まはる 通・三七一バ

採った範囲では、この型は一例のみである。先論でも一例しか掲げられなかった。

a3・2  型

○その かはり 小づかひまで 気を 付けてくれんさア

手・三九九ベ

採った範囲では、この型が九例ある。文語体二、口語体七である。第一文節が連体修飾であるもの五例、第四文節が、名詞と格助詞から成る連用修飾語であるもの四例である。先論で指摘した、第二文節が接続助詞を伴うものは、二例と少ない。第二文節が主語である例は、この度は見られなかった。



○ぬしの 内は 花菊さんの 客人の 近所かへ 手・三九一ベ  
採った範囲では、この型が七例ある。文語体三、口語体四である。第二文節が主語であるものは五例を数え、第三文節が連体修飾であるものも五例見られる。これらは先論と同じである。第二文節が接続助詞を伴う例は一つだけである。



○此間 橋場で 江月の よこ一行を みやした 通・三六二ベ  
採った範囲では二例。文語体一、口語体一である。第三文節は、二例とも連体修飾で、この点、先論と同じであるが、第一文節が主語・主題である例は、この度は見られない。なお「此間」は「先日」の意に解した。



○よしや 年を 入しても しんす 心さ 手・四一一ベ

採った範囲では二例。ともに口語体である。第三文節が上の文節を統括する点は先論と同じであるが、この度の例は、第三文節が連体修飾であるものが見あたらない。



○これ こみづな きやくの する 事也 通・三八五ベ  
採った範囲では、この型が七例ある。文語体二、口語体五である。第二文節、第三文節が連体修飾であるものは、各三例ある。先論で指摘した、第一文節が主語・主題であるものは二例のみである。

#### 四、洒落本の六文節文

この度採った範囲の六文節文の型で、先論に挙げたものと合わないものがある。即ち、



b 1・⑧ ㉞



型

b 2・① ㉞



型

b 2・① ㉞



型

b 2・⑧ ㉞



型

b 2・⑧ ㉞



型

一 a ① ㉞



型

一 a ① ㉞



型

二 b ① ㉞



型

右十二例が、この度見あたらなかった。

また、先論がなく、この度あった例、

○もふ いふなんす 事が なかア

ゆるりつと お休なんし

これは、

通・三八三べ

○わっっちゃ 跡月から 月の物を みんなから いっそ 苦勞  
だよ 手・四一三べ  
これは、

(一) a 2



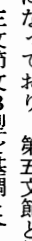
型 といえよう。第四文節が接

統助詞を伴うことと、第五文節が副詞であることから見て、三文

節文A型を基調とすると考えられる。  
○おめへのように 喜のさんに 情を つくした 人も あるに  
ノウ 通・三六二べ

これは、

(一) b 1



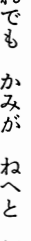
型 といえよう。第四文節が連

体修飾になっており、第五文節と第六文節とが主・述関係にあるこ

とから、三文節文B型を基調とすると考えられる。  
○づきをんを ゑりまきに して 中の町ぞうり 八わたぐるの  
くつたび 通・三五七べ

これは、

一 a ①



型 といえよう。第五文節が連

体修飾になっており、第四文節と第六文節とが対等(並列)の關係

にあることから、四文節文a1型を基調とすると考えられる。  
○それでも かみが ねへと 何か ふところが いねへやうだ  
これは、 通・三七〇べ

一 a ③




型 といえよう。第三文節が接

(一) a 1 型 といえよう。第四文節が条件を示すし、第五文節が副詞であることから見て、三文節文A型を基調とすると考えられる。

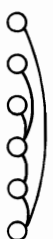
統助詞を伴い、第四文節が疑問詞「か」を伴って連用修飾になる点、四文節文 a 3 型を基調とすると考えられる。

○そればかりでも 五十の たゞきで 江戸が もの は あらア  
手・四〇〇ペ  
これは、


二⑥②  型 といえよう。第四文節が連体修飾になっており、第五文節と第六文節とが主・述関係にあることから見ると、三文節文 B 型を基調とするようにも考えられるが、この型のもの三例は、すべて、第一文節が第六文節を修飾することから考えると、四文節文 b 1 型を基調とするとしてもよいように思われる。

○何 今時分まで うか／＼ している 客が あるものか  
通・三八五ペ

これは、

二⑥③  型 といえよう。これも、第四文節が連体修飾で、第五文節と第六文節とが主・述関係にあるので、一応、三文節文 B 型を基調としかと思われが、この型のもの三例すべて、第一文節が第六文節を修飾するので、四文節文 b 1 型を基調とするものと考えておく。

○まだ 左衛門と いふ 字の つかぬ かゝあ 通・三五八ペ  
これは、

二⑥③  型 といえよう。一例のみで、基調とする型を決めかねるが、第三文節が連体修飾になっており、

第四文節と第五文節とが主・述関係を保ちながら第六文節の連体修飾になっている点から、四文節文 b 2 型を基調としているものと見ておく。

さて、左のものは、先論にも、挙げておいた型である。

a 1・①⑦  型

○かなやの 白妙が 追善の めりやすは 何ンとか いったつ  
けの 通・三六一ペ

採った範囲では、この型は右の一例だけである。第一文節の下に、五文節文 a 1・1 の型を見ることができぬ。

a 1・①④  型

○きのふ 長崎屋の こはんが 所から 隅田川を もらった  
通・三五九ペ

採った範囲では、この型は一例だけである。これは、五文節文 a 1・1 型の「白玉やの たな下の あたりにて へんじを する 通・三八六ペ」によく似ているが、四文節文 a 1 型の「ふすまの間から 茶づけ茶わんを 出す 手・三九九ペ」とは、非常によい一致を示す。

a 1・②⑦  型

○目を ねむって ぐっと ひっかけ むねを たゞく  
手・三九九ペ

採った範囲では、この型は、右の一例だけである。第四文節が接続助詞を伴う点、五文節文 a 1・2 型と比べられる。

a 1・②⑦ 型

○何か せわしく 又 かけて 二丁目へ はいる

通・三七二六

採った範囲では、この型は三例ある。文語体二、口語体一である。第二文節と第五文節とに、時間や場所を表す語を見ることの多い型である。

a 1・③④ 型

○あん二郎は よいより 京丁の わけにて おす川と おふく

ぜつ 通・三八三六

採った範囲では、この型は、文語体一、口語体一の二例である。第三文節が連体修飾になり、第四、第五文節が、名詞と格助詞とから成る連用修飾語である点、五文節文 a 1・3 型と通うものがある。

a 2・①⑦ 型

○もう 一枚 だかせたら 何が 出ようも しれねへ

手・四〇〇六

採った範囲では、この型は、文語体一、口語体一の二例である。第三文節が連用修飾である点と、第四文節と第五文節とが主・述関係にある点とを合わせると、四文節文 a 2 型と比べられようか。

a 3・②④ 型

○男 一匹と いふなんすからは たゞし 犬の 生がはりかへ

通・三八三六

採った範囲では、この型は四例ある。文語体一、口語体三である。第三文節が接続助詞を伴うもの二、第三文節が連用中止であるもの一、という有様を見ると、先論での特徴と一致するものと考えられる。

b 1・①⑦ 型

○あはせばおり くの 無地八丈 まへ下り ながき 仕方

通・三五七六

採った範囲では、この型は二例ある。二例とも文語体である。先論のものと同じく、五文節文 b 1 に比べられるものである。

b 1・①④ 型

○天地は やつぱり ふとじけだが 風帯 一文字は あんらく

あんさ 通・三六二六

採った範囲では、この型は、右の一例だけである。第三文節が接続助詞を伴う点と、第四文節と第五文節とが対等の関係(並列)にある点とから見て、四文節文 b 1 型を基調とするといえよう。

b 1・①⑦ 型



○いわしと きすの ほうろくやき かわりの 吸物 出る

通・三七二ペ

採った範囲では、この型は二例ある。ともに文語体である。第四文節が連体修飾になる点、先論と同じである。

b 1・②⑦

○丁子屋といへば みさ山も とんだ うつくしく なった

通・三七一ペ

採った範囲では、この型は二例ある。文語体一、口語体一である。第三文節が主語になるところ、四文節文b 1型に比べられる。

b 1・③④

○こんやア 又 おめへがたの むつごとを きく 役だね

手・三九九ペ

採った範囲では、この型は一例のみである。この例では、第四文節と第五文節との間に主・述関係は見られない。しかし、第五文節が連体修飾である点は、先論と同じである。

b 2・②⑦

○土いろ 糸ぎり くすりの かより あんばいを みて

通・三六二ペ

採った範囲では、この型は一例のみである。この型は、先論の例のように、文中、主・述関係をもつものが目につくので、「くすりの」

と「かより」とを、一応、主・述関係にあるものとして処理した。第四文節が連体修飾になると見るならば、三文節文B型を基調とするといえようか。

b 2・②④

○ほどなく かぶろ 火入の 火を ふきおこしながら 持きたる 手・三九一ペ

採った範囲では、この型は一例のみである。第五文節が接続助詞を伴う点、五文節文b 2・1に近いといえようか。

b 2・③⑦

○松蔵 藤二 三味子や 我物が まいってをりますから ぬけにこうござります 通・三七六ペ

採った範囲では、この型は一例のみである。第一文節から第四文節までは、対等の関係(並列)にある。第四文節と第五文節とが主・述関係を、形の上からもつことと、第五文節が接続助詞を伴う点とを合わせると、四文節文b 2型を基調としているといえよう。

b 2・③⑤

○あいつア とうもろこしを よこぐわへに しゃうと いふ づらだ 通・三八五ペ

採った範囲では、この型は三例ある。三例とも口語体である。第五文節が連体修飾になるもの一例、第二文節が連体修飾になるもの一

例である。用例が少ないこともあって、基調となる文型を定めるのは難しい。

一 a ①・④  型

○その めりやすが 此ごろ ひろめの あった すがほとやら  
かへ 通・三六一へ

採った範囲では、この型は三例ある。三例とも口語体である。第五文節が第三・四文節を統括していること、先論と同じである。

以上見てきたように、洒落本においても、五文節文の大半は三文節文を基調とすると考えられるし、六文節文の多くは、四文節文を基調としているように見える。ただ、例外も幾つかあるし、用例が少なく不明であるものもある。これらについては、後の機会をまちたい。

## 五、十文節文について

十文節文を見て、すぐ目につくことは、接続助詞が、六文節以下の文のものよりも、非常に多くなっているということである。例をあげよう。

○山三郎 今は 心安しと 辻堂に かへりて 見れば こは

いかに 銀杏の前は おはさず 稲・四四へ

洒落本でも、この度採ったものを見ると、三文節文では、百二十二例中、接続助詞は七つである。四文節文では八十四例中十四。五文節文では五十二例中十。六文節文では四十六例中二十三である。

採った用例数における接続助詞使用回数割合は、三文節文では五・七％であり、三文節文を基調とするもの多い五文節文では十九・二％である。更に四文節文での、用例数における接続助詞使用回数割合は、十六・七％であり、四文節文を基調とするもの多い六文節文では五十％である。

ところで、「はじめに」に記した範囲で採った十文節文の全用例四十文を見ると、接続助詞は五十一を数えることができる。用例数における接続助詞使用回数割合は百二十八％にもなる。このことは、十文節文は、五乃至六文節文を句とした時の、句の複合体として見ることが可能ではなからうか、という推量をさせるのに十分である。それで、接続助詞を日安に、中止法、条件法をも合せ考え、十文節文の、文節相互の関係からする基調を観ることにする。

### その一

複合的基調が、割に明らかなものの例をあげる。

○ふくい町の 豊国が 所から 人が きたら わすれずに 此

ちうの やしきのを 二分 やるのだよ 通・三六八へ

これは、「ふくい町の」①から「きたら」⑤までと、「わすれずに」⑥から「やるのだよ」⑩までとに分けることができよう。前者（第一文節から第五文節まで）は、五文節文 a 1・1 型、例えば、

○白玉やの たな下の あたりにて へんじを する

通・三八六へ

と同じ構成であるといえよう。後者(第六文節から第十文節まで)は、五文節文 a 1・3 型、例えば、

○このごろも どこかの 番に かゝへを 仕てもらったそうだと同じ構成であると考えられる。

通・三五八べ

○てめへ おれが 事ばかり そんなに いふが をれが 顔の たたねへやうな 事を するなよ 通・三八一べ

「てめへ」①を「するなよ」⑩の主語と見て、「おれが」⑧から「いふが」⑤までと、「をれが」⑥から「するなよ」⑩までに①を加えたものとの二つに分けて考えてみる。②から⑤までは、四文節文 a 1 型と見られる。例えば、

○もへぎさなだの 下タじめを 帯に している 通・三五八べ  
これと構成が合う。あとの六文節は、六文節文 b 2・③④の型を形の上では備えていて、しかも、下から五番目の文節が連体修飾になる点だけは、「てめへおれが事ばかり云々」の例と合う。しかし、下から四番目の文節と三番目の文節とが主・述関係にある点まで考慮するなら、五文節文 b 2・3 型、例えば、

○まことの 智慧の ある 人は 稀なり 矢・六九四べ

これに合う。従って、この十文節文は、四文節文 a 1 型と五文節文 b 2・3 型の合併したものに、「するなよ」の主語としての第一文節を添えたものと考えてもよからうか。

○そんなに さわいだら 又 やりてが みせ三味線の 一と

いふ 声で りくつを いをふが 通・三七六べ  
「やりてが」④から「いをふが」⑩までと、「そんなに」①から「又」

⑧までを「いをふが」⑩に繋いだものとの二つに分けてみる。「いをふが」を二回使うことにするのである。こうして、④から⑩までの七文節を一まとめにしてみる時、先論を書く時に用意していた、黄表紙を主とする七文節文の用例八十を参照してみても、当てはまる型を見つけることができない。それで、⑤から⑩までの六文節について調べると、六文節文 a 1・①⑦型、例えば、

○鼻の 先へ 出づる 智慧自慢に ろくなは なし

矢・六九四べ

これが構成上、よく合う。次に、①②③⑩の四文節についてみると、四文節文 a 1 型、例えば、

○ねねへと いひ出しチャア 又 ねねへ 手・四一三べ

これが構成上、よく合う。従って、「やりてが」④は、四文節文 a 1 型と六文節文 a 1・①⑦型(但し、⑩は二回数える)との合併型に添えられた、⑩の主語と見てもよからうか。

○狂言と いへば 宗十郎松が 六けんの おさくを ぎれて

ふる石の 豊倉へ 凝って いくそうさ 通・三六四べ

この例では、「宗十郎松が」⑧から「ぎれて」⑩までが、内容上、よいまとまりを示すので、「狂言と いへば」①②を、「ふる石の」から「いくそうさ」⑩までの四文節に繋いで考えてみる。そうすると、⑧から⑩までは、四文節文 b 1 型、例えば、

○ちかめが とんだ 物を みつけ出した 通・三六九べ

これと、よい一致を示す。次に、①②と、⑦から⑩までのものとを繋いだものを見る。六文節文 a 1・⑧⑦に似ていて、例えば、

○高札が できてから 大門の きはへ かごが なりません

通・三八六へ

これと比べられるようであるが、下から二文節目に難がありそうである。それで、⑦から⑩までの四文節をとりあげると、四文節文 b 2型、例えば、

○かんのんの 地内に いやしたが かこわれたそうでござり

やす 通・三六一へ

これと構成が、かなり合う。もし、この見方が許されるならば、①

②文節は、四文節文 b 1型と四文節文 b 2型との合併型の句に添えられた条件句と見ることができようか。

○むかふの ひやうごやなぞにては もふ みせを ひらきわ

かいもの あげゑんを ふき のうれんを かける

通・三八四へ

この例は、句の内容から見て、「むかふの」①から「ひらき」⑤までと、「わかいもの」⑥から「かける」⑩までとに分けて扱うのがよいであろう。そうすると、①から⑤までの句は、五文節文 a 3・2型、例えば、

○むかふの はめへ 小べんで のの字を かきながら

通・三八四へ

この例は割注の文で、完結していないが、十文節文の例と、構成上、かなり合っている。次に、⑥から⑩までの五文節は、五文節文

a 1・3型と外見上一致するが、構成の面では他の例と合わない。それで、⑥⑦⑧と⑥⑨⑩との、三文節文二つにして考えると、三文節文 A型、例えば、

○りやうりばん 肴を かつている 通・三八四へ

この例と構成上よく合う。従つて、この十文節文は、五文節文 a 3・2型と、三文節文 A型二つ（但し⑥は二回数えた）との合併型と見ることができようか。

## その二

複合的基調が分かりにくいものの例をあげる。

○山三郎 今は 心安しと 辻堂に かへりて 見れば こは

いかに 銀杏の前は おはさず 稲・四四へ

「山三郎」①から「見れば」⑥までと、「こは」⑦から「おはさず」⑩までとに分けてみる。しかし、①から⑥までの六文節文の型は、まだ、同類のものを見いだしていない。②から⑥までの五文節は、a 2・1型に似ているが、この型の五文節文三例に見える、第一文節が連体修飾または第二文節と並列の関係にある、という特徴が見られない。⑦から⑩までの四文節は、下の二文節が、主語（又は主題）・述語の関係にあることを重視するならば、四文節文 a 1型、例えば、

○番頭が 白風でなければ 金は 儲からぬ 矢・六八へ

この例が、ともかく当てはまるようである。上の句に五文節文 a 2

・1型、下の句に四文節文a1型を当てるにしても、第一文節は、第六文節「見れば」の修飾のために、特に添えられたものとして扱わなければならないようである。

○衣服 大小 懐中物 提物など その 儘に あれば 盗人の 仕業とも おぼえず 稲・四五べ

「衣服」①から「あれば」⑦までと、「盗人の」⑧から「おぼえず」⑩までとの二つの句に、一応、分けてみる。ところで、①から⑦までの七文節は、先に、黄表紙中心に集めた例の中に、型だけは似たものがある。例えば、

○おのが 金を つかふ 時は 始終 滅亡と 響くなり  
寿・六二八べ

これは、型は同じだが、構成が違う。それで①から④までを⑦と繋いで五文節してみると、五文節文b2・3型と似るが、今までに採った五文節文b2・3型の例に、「衣服大小ユキタ」と類似の構成を持つものを見つけていない。上の句の見方を変えた序に、下の句の見方を変えて、⑤から⑩までの六文節にしてみると、六文節文b1・①㊦、例えば、

○悪の 的へ あたれば 地獄の 有様を 出す 夫・七〇一べ  
この例と、かなりの一致を示す。それにしても、①から④までのものの扱いは、解決を後にまたねばならない。

○父 四郎太夫 これを はちて おほく つまに のぞむ も  
のあれども あたへず 両・三ウ

「父」①から「はちて」④までと、「おほく」⑤から「あたへず」⑩までとに、一応、分けて考えられる。しかし、上の句は、四文節文a1型、例えば、

○女房 おふじ かつてより 出る 通・三七〇べ

これと、構成は似るものの、完全に一致することはない。また、⑤から⑩までの六文節については、この型と一致する六文節文の型をまだ見つけていない。もし、②③④⑤⑥の文節を一まとめにすることが許されるならば、五文節文a2・2型、例えば、

○それでも 糸菊さんにおめへを とりもつてくれると いひ  
んしたとき 手・四〇〇べ

これと型は似ているものの、構成上難点があるろう。結局、上の句は一応、四文節文a1型を当ててみることも可能であろうが、下の句については、後の考えをまたねばならない。

十文節文四十例について、代表的なものとの問題のあるものとをとりあげて、その基調について考えてみた。分からないものもはともかく、十文節文を支える基本的文節文は、三文節文から六文節文までで、それも、六文節文によって支えられるものの数は少ないのを見るのである。この度は、洒落本の例が多かったのであるが、読本においても、黄表紙においても、採った例から見る限り、大きな差は無さそうである。従って、十文節文の基調も、先論で言及したのと同じく、根本的には、三文節文と四文節文との、文節相互の修飾・被修飾の関係に求められるように考えられる。

## 五、おわりに

二十文節文まで扱って見たかったのであるが、紙幅の関係で果たせなかった。次回に触れてみる積りである。

「たまゆら第十二号」に、京伝の文では、「二乃至三文節によって修飾される被修飾文節の、一文中での出現位置が、略々定まっている」と書いたが、その理由が、少しばかり見えてきたように思う。

今までに存疑として残した点、文と文との関連など、問題は多い。機会を得て、少しずつ明らかにしていきたい。

### 注

1 ㉞ 「山東京伝の、口語文と文語文との関り」 「近代語研究第六集」所収、昭・五十五・五

㉟ 「山東京伝の五文節文と六文節文との基調」 「たまゆら第十二号」所収、昭・五十五・十

2 江戸時代語研究家、主著「天草版金句集の研究」